滿洲ノ新興工業

山口高等商業學校
東亜經濟研究科
三宅繁夫

目次

目次

五、滿洲工業國策會社現勢

(一)工業

(1)滿洲重工業開發株式會社

イ、滿洲重工業開發株式會社ノ使命

ロ、滿洲重工業開發株式會社ノ現狀

ハ、重工業資源

二、滿洲重工業開發株式會社ノ管理法

技苹

(2)株式會社昭和製鋼所

(3)株式會社本溪湖煤鐵公司

(4)東辺道開發株式會社

(5)滿洲輕金屬製造株式會社

(二)

(1)	同和自動車株式會社
(2)	株式會社奉天造兵所
(3)	滿洲計器株式會社
(4)	滿洲飛行機製造株式會社
(5)	滿洲自動車製造株式會社
(6)	滿洲工作機械株式會社

(三)

(1)	滿洲石油株式會社
(2)	大同酒精株式會社
(3)	滿洲曹達株式會社

(4) 滿洲合成燃料株式會社
(5) 滿洲油化工業株式會社
(6) 吉林人造石油株式會社
(7) 滿洲大豆化學工業株式會社
(8) 滿洲電氣化學工業株式會社
(9) 滿洲硫安工業株式會社
(10) 滿洲化學工業株式會社
(11) 滿洲特殊製紙株式會社

序説

滿洲國ノ工業ハ其ノ當初農業生産物ヲ原料トスル幼稚ナ原始的工業ニ依テ出發シ漸次時代ノ波ト共ニ近代工業ノ進出ヲ見ルニ至ツタ。然シ乍ラ滿人側ノ工業ハ未ダ微々タルモノデ建國以前ハ商業資本ヲ主トシ關東州及滿鐵附屬地ニ於ケル日本側ノ資本以外ニハ殆ンド見ルベキモノハナカツタ。

滿洲國工業ノ發達過程ニ最大ナル力ヲ投ジタモノハ日露戰役前ニ於ケル露西亞ノ進出ニ對スル日本ノ反撃ヨリ齎サレタ。次イデ其後ニ於ケル日露戰役ニ於ケル日本ノ反撃ヨリ齎サレタ。次イデ其後ニ於ケル歐洲大戰ヲ契機ト

炭採掘及世界大戰デアル。

シテ日本ハ産業開發ニ努力シテ來タ。然レ乍ラ當時ニ於ケル産業形態ハ日本ニ對スル工業原料ノ供給ニ偏シ滿洲ハ其ノ再製品ノ消費地タル關係ニアリタル事ト軍閥政權ノ壓政、助成機關ノ不備、文化水準ノ幼弱ニ加ヘテ匪賊ニ依リ社會ノ不安、企業家ノ財的貧弱、企業的才能ノ未熟等デ其ノ工業的素地ハ尚脆弱タルヲ免レ得ナカツタノミナラズ、前述ノ如クソノ發展地域モ滿鐵沿線附屬地ニ局限サレテヰタ。

所ガ滿洲事變ノ發生ハ滿洲國工業界ニ一大轉換機ヲ劃シタ。滿洲建國ニヨル外國資本ノ衰退日本ノ滿洲國承認ニヨリ日滿一帶不可分

関係ノ原則ガ確立サレ、加之ニ工業原料ノ豊富
殊ニ重工業ノ必要資源ノ富裕ナ事、動力ノ豊潤、
低廉ナル労働力等ノ發達條件ハ廣義國防的見
地ニヨリ日滿間ニ更ニ高度ノ經濟的依存関係
ヲ樹立シコトニ經濟面ニ速カナ而モ堅實ナ開
發ヲ招來セシムルニ至ツタ。

建國五年ニシテ概ネ第一期準備工作ヲ終リ、
續イテ一貫セル産業統制ノ下ニ第二期五箇年
計畫ノ力強イ歩ヲ踏ミ出シタノデアル。此ノ
如キ第一期建設期ヲ振返ツテ見ルニ、コノ五箇
年間ニ於テ滿洲國ハ唯一ノ經濟指導目標タル
經濟建設綱要ノ主旨ニ則リ急速的ナ生産能力

ノ擴大强化ヲナシテ居ル。而モコノ燃ユルガ如キ工業建設ニ一層拍車ヲカケタモノハ次ノニツノ事實デアル。即チソノ一ツハ重工業ノ綜合經營ニ當ル大國策會ノ出現デ、他ノ一ツハ「東洋ノザール」トモ稱スベキ東辺道大資源ノ發見及今次ニ於ケル資源調査ノ結果ニ依ル影響デアル。

二、滿洲工業政策

滿洲ニ於ケル工業政策樹立ハ滿洲經濟ノ健全ナル發達上極メテ緊要ナル事柄デアリ、更ニ進ンデハ日滿工業統制ノ基礎トモナルベキモノデアル。

日本及滿洲ノ工業統制ノ現狀及將來ヲ通貫シテ考察シタ場合、滿洲ニ於テ先ヅ第一ニ工業資源ノ開發及ビ其ノ統整ヲ行ヒ極力日本工業現在能力ノ活用ヲ計ル事、第二段トシテハ滿洲ニ於テ、企業有利トスル新興工業ニ對シ殊ニ日本既存工業ト衝突ノ虞レアルモノハ兩國利害關係ヲ考慮シ資本ト共ニ技術ノ進出ヲ取入

レ充分協調ヲ保持シテ日満単一経済ブロツク
ヲ成立セシムル事ガ必要デアル、更ニ之等ノ協
調工業ニ関シテハ協定條約ヲ締約シテ交通ヲ
自由ニシ其ノ精神ヲ発揮スル必要ガアル之
即チ日満工業統制ノ要諦デアル。
満洲工業ノ採ルベキ工業政策ヲ考察スルナ
ラバ第一ニ重工業ハ国家的企業統制ニ依ルコ
ト、即チ重工業ハ其ノ性質ト情況ニ於テ各種工
業ノ鍵トナリ、且又幹根ヲナス重工業デアルコ
ト、而シテ此ノ工業ノ性質トシテ相當ナ投資ト
統制ヲ必要トスル點ニ関シテハ現在満洲国策
會社ニ於テ行ハレテヰル事ハ吾々ノ認知スル

所デアル故ニ從來ニ於ケル私的企業統制カ結局ニ於テ成功セズ、列强ニ於テ等シク此ノ國家統制ニ移動シツヽアル現狀デアルコトヨリシテ獨逸ノ國家統制ヲ新興滿洲國ニ於テ此ノ政策ヲ採ル必要ノアルハ事明ナ事デアル、第二ニ一般工業ニ於テ資源ノ價値、配給ノ程度及範圍ヲ考ヘ有望工業ハ日滿工業統制下ノ下ニ極力保護助成スベキデアル。

二、滿洲工業資源

滿洲ニ於ケル生産資源トシテノ工業資源ヲ見ルニ農畜林鑛産ト各般多樣ニ亘ツテ中心ガ今此處ニハ各工業資源ニ關シテ概略スルコトヽスル。

(1) 農産工業資源

滿洲ニ於ケル農産工業資源ノ大ナルコトハ其ノ宏大ナル土地ノ利用價値ガ極大ナルコトニ存スル。滿鐵調査課ノ推定ニ從ヘバ滿洲ノ面積ハ一三〇萬平方粁、人口三千七百萬人ニシテ面積ハ我國ノ約二倍ニ反シテ人口ハ日

本改地ノ約半分ニ相當スル、而シテ此ノ土地ノ利用狀況ヲ見ルニ滿洲ノ農耕適地ハ五千萬陌餘推算セラレ其ノ内既耕地ハ南部滿洲、滿鐵沿線ヲ中心トシテ一千八百萬陌ニ達シテオル。殘餘三千二百萬陌ハ所謂未耕地ニ屬シ北部滿洲其他デアリ、最近ノ狀勢ニ依レバ之等ハ急速ナ開發ヲ豫想セラレ既耕地ニ對スル農法ノ改良增收ト共ニ滿洲ノ地ハ正ニ世界ノ穀倉トモ

ベキデアル。

滿洲ノ農產ハ大豆ノ年產四百餘萬瓲ヲ大宗トシ、コレニ次グハ高粱三百九十八萬瓲、粟玉蜀黍二百萬瓲餘デ此ノ外ニ小

麥、米、雜穀、麻質、茎等モアル。

現在重要農產資源トシテ利用サレテヰル工業原料ハ周知ノ如ク油坊工業原料ヲ第一トシテ大豆、次ニ燒鍋工業（高粱酒釀造工業）原料トシテノ高粱、更ニ製粉工業トシテノ小麥等デアル。

之等油坊、燒鍋、製粉ハ滿洲ニ於ケル土着三大工業トシテ發達シテ來タモノデアルガ、其ノ穀物ノ收穫カラ見テ當然ノ事デアロう。其他ノ資源トシテハ纖維工業資源トシテ大麻、青麻、綿花、柞蚕繭ガアル。青麻ハ麻袋工業ノ原料トシテ印度ジュートト共ニ用ヒラレ、綿花ハ滿洲紡績工業ノ前途ノ發展ト共ニ因果關係ヲ有スル許

リデナク、我國紡績工業ニ取ツテ將來重要資源トナルベキ運命ニアリ、盛ニ栽培ガ奬勵サレ又甚ダ將來ヲ要望サレテヰル。

(2) 畜産工業資源

滿洲國ニ於ケル畜産ハ其ノ廣大ナル疆域ト豊富ナル家畜飼料ノ生産ト家畜ノ飼育ニ長ズル漢人、蒙古人ニヨツテ營マレ農業ト共ニ國民經濟向上ニ於ケル根幹ヲナシテヰル。

蒙古人ハ本來遊牧ノ人種デアルガ、今ハ興安北省ノ一部ニノミ遊牧トシテ殘リ、他ハ定着放牧ヲナシ一般ニソノ食料、住居、衣類等殆ンド家

[illegible]

畜ニ依據シテヰル。

漢族ニハ農耕運搬ノ為ノ牛馬、食料ノ為ノ豚等ノ飼育ガ多イ。

然シ乍ラ現在ノ家畜ハ漸ク國内ニ於ケル需要ノ充タスニ過ギナイ状態デアル。

家畜ノ主ナルモノハ放牧地帶ニ於テハ山羊、綿羊、牛馬等デ農耕地帶デハ牛、馬、騾馬、驢馬等ノ役畜ト飼育スルト共ニ羊、豚、鶏等ノ肉用畜モ飼育シ、其ノ外興安嶺ノ西北ニ駱駝ガアリ東部山岳地帶デハ密蜂ガ飼育サレテヰル。

又滿洲國各地ニ無限ニ棲息スル野獣、野禽ハソノ種類多ク毛皮或ヒハ肉用資源トシテ狩獵業ノ目的物トナツテオルガ濫獲ノ結果激減ノ

一途ヲ辿リツヽアルヲ以テ滿洲國政府ハ康德四年（昭和十二年）鳥獸保護法ヲ公布實施シ高級毛皮獸ノ捕獲ヲ禁止スル等毛皮資源ノ確保ニ努力シツヽアル。

滿蒙ハ農業ト畜力トハ切離シ難キ關係ニアリ、現在滿洲ノ農法カラ畜力ヲ除ケバ農業ノ成立ンナイ程家畜ハ重要ナ位置ヲ占ム、又蒙古一帶ニアツテハ今尚水草ヲ追フ牧畜ノ唯一ノ生活資料トシテ斗ん有樣デアル。

只其ノ飼育管理法ガ至ツテ粗放デアルコト又氣候風土等ノ關係デ其ノ質ニ種々缺點ノアル爲工業資源價値ヲ低メテ斗ルコトハ遺憾デ

アル。

之等ノ缺點改良ニ關シテハ種々考究サレ又實行モサレテヰルノデ時ト共ニ解決改善サレ將來ハ極メテ有望ナ工業原料トナルコト考ヘラレル。

半ハ滿洲家畜中主要ナルモノヽ一ツデ現在三百萬頭ノ飼育ヲミテヰルガ地域飼料等何レノ點ヨリ見テモ增產ノ餘地ガ多分ニアル。

馬百九十萬頭、豚五百萬頭、羊三百萬頭

外ニ騾馬、驢馬、駱駝ガアル。

(3) 林産工業資源

林産モ亦滿洲ニ豐富デアツテ鴨綠江、圖們江、拉林河等ノ流域並ニ大小興安嶺一帶ニ森林ヲ有シ森林面積ハ三二、四五七ヘクタール滿洲全面積ノ三分ノ一ヲ占メテヰル。

有用樹種ハ針葉樹八種、濶葉樹二十一種、立木蓄積量一、四七五萬立方米ト云ハレル。而シテ其ノ大部分ハ官有ニ屬シ、從來數十年ニ亘リ濫伐ノ弊ガアツタ。滿洲國成立以來國營ノ方針ヲ採リ、經營ノ合理化、森林資源ノ保續、國土ノ保安、日滿兩國ニ對スル林産資源ノ確保等ノ見地カラ、スベテソノ方針ニ基ヒテ經營セラレルコトヽナツタ。

斯クシテ木材トシテハ勿論パルプ、人絹パルプ等ノ製造モ已ニ實行サレ、夫々二、三ノ會社ニ其ノ經營ヲ許可シ、若シクハ滿洲國政府自ラ其ノ經營ニ從事スルモノモアル。

(4) 鑛産工業資源

滿洲ニ於ケル鑛産工業資源ハ農産工業資源ト共ニ滿洲工業資源ノ雙璧ヲナスモノデアルト稱シテヨカロウ、事實農業資源ニ對シテ數ニ於テ、量ニ於テ對抗スルモノハ鑛資源デアル。由來滿洲ニ於ケル鑛産資源ハ土地開拓ヲ一ツノ一大不祥事トシテ取扱ツテ來タ述見ト一

[illegible]

方又利權擁護ノ愛國的ノ美名ノ下ニ名ヲ藉リテ「モンロー」主義ヲ採ツテ來タコトニヨリ、之等ノ資源ハ世ニ餘リ多ク浮ビ出ナカツタ憾ミガアル。然ルニ今ヤ新國家ノ成立、世體一變、此ノ自然天與ノ寶庫ハ新興工業ニ燃ユル滿洲國ノ手ニヨツテ吾人ノ前ニ展開セラレントスルノデアツテ前途洋々タルモノガアル。

鑛産資源ガ滿洲ニ於テ相當ニ豐富ナルコトハ世人ノ夙ニ知ル所デアルガ、現在判明セル以外ニモ今後精密ナル調査ヲ經バ尚ホ發見シ得ルモノヽ存スルコトハ明ラカデアル。現在知ラルヽ所デハ滿洲ノ鑛物ハ約三十種ノ多キニ

達シ、其ノ内ノ主要品ヲ挙ゲテモ金屬鑛物六種、非金屬礦物十三種ト云ハレルガ就中最重要鑛物トシテハ鐵、石炭、泥炭、耐火粘土、菱苦土鑛、苦灰石及金、石灰石等デアル。

滿洲國ニ於ケル石炭ノ埋藏量ハ滿洲事變當時ハ大略五十億瓲ト云ハレテ中タガ其後ノ調査ヤ新發見ニ依リ二百億瓲ト認メラレルニ至リタ。

滿洲國ノ鐵ハ滿洲事變當時迄ハ十三億瓲程度ト認メラレテヰタガ、其後新發見モアリ調査モ行ハレテ現在ハ三十億及至三十五億瓲ノ埋藏量アリト見積ラレテヰル、其ノ中ニハ貧鑛モ

[illegible]

富鑛モアル。

油母頁岩ハ撫順炭礦ニ豐富デ已ニ該地ニ於テ製油ヲ行ヒ菱苦土鑛、耐火粘土、苦灰石等ニツイテモ夫々稼行ス。

金ハ北滿洲ヲ以テ主要産地トシ漢河、逢源、興安、庫瑪爾河、梧桐河ナドハ特ニ知名ノ産地デアル。

石灰石モ豐富デ尚鉛、亜鉛其他種々ノ鑛物ヲ産スル。

三、産業開發五箇年計畫

建國五年ニシテ建設第二期ニ入ツタ滿洲國ハ政治、經濟、文化各般ニ亘リ劃期的飛躍ノ轉換期ニ直面シタ。

其ノ第二期經濟建設ノ實踐トシテ生レタノガ産業開發五箇年計畫デアル。

本計畫ノ主眼ハ日滿ブロック政策ノ根本方針ニ基キ準戰時體制ノ強化ヲ圖リ、有事ノ場合ニ於ケル滿洲國内ノ自給自足ト日本不足資源ノ供給トヲ可能ナラシメ以テ國力ノ進展、國民生活ノ安定ヲ促進スル事ニアルノデアル。

故ニ關係當局ニ於テハ先ヅ康德四年（昭和十二年）ヲ初年次トシテ、鑛工業部、農畜産部

文通通信部ハ移民等ノ各部門ニ多額ノ増度賀源ヲ以テ同計畫ノスタートヲ切ツタノデアル

が康德五年（昭和十三年）三月初年度ノ實績ニ鑑ミ第一次ノ修正ヲ行ヒ開發目標ヲ最初計畫ノ約二倍ニ擴大シタ。

修正五箇年計畫ノ内容ハ鐵、石炭、液體燃料、自動車、飛行機等ノ製造ニ重點ヲ置キ、其他ノ部門中交通通信部モ他部門ノ計畫規模擴張ニ適應シテ修正擴充サレタ。

今茲ニ工業關係主要品目ニツキ修正前ノ開發目標ト修正後ノ開發目標トヲ比較スレバ次ノ如キモノト思惟サレル。

品名	修正開發目標	修正前開發目標
銑鐵	約五〇萬瓲	二五三萬瓲
鋼塊	約三五〇萬瓲	二〇〇萬瓲
鋼材	約二〇〇萬瓲	
石炭	約三八〇萬瓲	二五五萬瓲
電力	二六〇萬KW	一四〇萬KW
パルプ	約四〇萬瓲	一二萬瓲
鹽	約一〇〇萬瓲	八七萬瓲
金（四箇年累計）	約三億圓	（五箇年計）二億圓

其他アルミニウム、マグネシウム、亜鉛、鉛、銅等ノ現下ノ緊要ナ金屬ニ就イテモ能フ限リ増産ヲ期スルト同時ニ機械工業、液體燃料等ノソレニモ多大ノ重點ヲ置クコトニナツタノデアル。

然ルニ今次突如勃發シタ第二次歐洲大戰ノ擴大ハ日滿經濟特ニ滿洲ノ生産力擴充計畫ニ影響ヲ及ボストコロニ甚ダ大デ政府當局デモ既ニコレガ對策ニ着手シテヰルコトハ勿論デアルカ、今後ノ戰爭ノ進展ノ如何ニ拘ラズ獨逸ヲ中心トスル歐洲各國ヨリノ輸入依存ニヨル生産機材ノ獲得ヲ一應脱却シテ新ナ方針ノ確立

ヲ計ルコトニナツタ。

即チ産業五箇年計畫中ノ重要部門デアル發電、液化、製鐵關係ノ一部主要機材ハ歐洲（特ニ獨逸）ヨリノ輸入ニヨルコトトナツテオルガ、現下ノ情勢ニ依レバコレラノ入手ハ困難視サレルニ至リ既定計畫ノ全面的改訂ガ要請サレルニ至ツタノデアル。

コレガ爲政府當局ハ今後ノ對策トシテハコレヲ機會ニ國産機械製作工業ノ飛躍的ナ發展ト技術ノ向上ヲ行ヒ機器類ノ對外依存性ノ清算ヲナシ國内自給自足ノ確立方針ニ向ツテ進ムモノトシテ頗ル期待サレル。

四、國策特殊會社

(1) 重要産業統制法

重要産業統制法ハ滿洲國政府カ建國以來事實的行政的行爲トシテ統制シテ來タ産業統制ノ狀態ヲ成文法化シ、之ニ法律的根據ヲ附與シタモノデアル。

ソノ特質ハ日本ノ産業統制法ノ如ク消極的ナ恐慌救濟ト整理的合理化ノ促進ヲ主眼トシ資本主義體制ノ延命ヲ目的トシテ出現シタモノデナク、滿洲國全體ノ積極的ナ經濟發達ヲ統制スル手段トシテ既存産業ヲ監督シ新興企業ヲ指導スル役割ヲ有スルモノデアル。

本法ハ兵器製造工業以下二十一産業ニツキ

(イ) 起業ハ許可ヲ要スルコト

(ロ) 營業者ハ事業年度毎ニ事業計畫及事務報告

(ハ) 書ヲ提出スルコト

(ニ) 主管部大臣ハ各會社ニ對シ公益命令デ統制

(ホ) 命令ヲ發スルコトガ出來ル

(ヘ) 各會社ノ營業及財産ニ關シ政府ハ必要ナル

(ト) ハ之ガ報告ヲ求メ又檢査ヲナシ得ル

(チ) 統制協定生産設備ノ變更、事業ノ緩渡、法人ノ

合併ニツイテハ政府ノ許可ヲ要ス

以上ヲ規定シテヰル。斯クノ如ク本法ハ廣

汎ナ各事項ニ亘ル公益的統制命令ト監督檢閲

[illegible]

權ヲ有スルモノデアツテ、本法制定ノ目的ハ前述セル如ク決シテ生産力抑制ノ爲デハナリシテ、ムシロ積極的ニ重要産業ノ國家的助成ヲ目的トスルモノデアル。

一 統制法ノ適用ヲ受クル廿一種目ノ重要産業ヲ列擧セバ左ノ如クデアル。

(イ) 兵器製造業
(ロ) 航空機製造業
(ハ) 自動車製造業
(ニ) 液體燃料(鑛油及無水アルコール)製造業
(ホ) 鐵、銅、アルミニウム、マグネシウム、鉛、亜鉛、金、銀及銅ノ製錬業

(ヘ)炭礦業（年産五萬瓲未滿ノモノヲ除ク）

(ト)毛織物製造業（手織機ニヨルモノヲ除ク）

(チ)綿絲紡績業

(リ)綿織物製造業（手織機ニヨルモノヲ除ク）

(ヌ)麻製線業（年産五十瓲以上ノモノ）

(ル)麻紡績業（手織機ニヨルモノヲ除ク）

(ヲ)製粉業（日産能力五百袋以上ノモノ）

(ワ)麥酒製造業

(カ)製糖業

(ヨ)煙草製造業（紙卷煙草年一千萬本以上ノ生産ヲナスモノ）

(タ)曹達製造業（天然曹達ノ精製業ヲ除ク）

(レ)肥料製造業(硫酸アンモニウム、硝酸アンモニウム、過燐酸石灰及石灰窒)

(ソ)パルプ製造業

(ツ)油坊業(抽出式ノモノ、壓搾器十五臺以上ヲ備フルモノ)

(ネ)洋灰製造業

(ナ)燐寸製造業

右ノ内(イ)及至(ハ)ハ國防及至基礎産業ニ屬シ、ソノ統制目的ハ國防上又ハ公共ノ利益等ノタメ絶對的必要ニ基クモノデアルガ、(ト)及至(ナ)ハ概ネ輕工業ニ屬シ其ノ統制ノ目的ハ業種ニヨリ夫レ夫レノ差ガアル。

大體ニ原料生産ノ發

[illegible]

達トノ調和需要ト供給トノ適合資本ノ二重投下ノ防止等之等産業ノ助長發達ヲ規整スルタメデアル。從ツテ二十一種ノ統制産業モ統制ノ内容ニハソノ目的ト強弱ノ差ガアルコトヲ知ラネバナラヌ。

(2) 特殊會社一覽表

會社名	公稱資本	拂込資本
工業		
滿洲重工業開發株式會社	四五〇、〇〇〇	四五〇、〇〇〇
株式會社昭和製鋼所	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇
株式會社本溪湖煤鐵公司	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
準東辺道開發株式會社	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇
滿洲輕金屬製造株式會社	八〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇
※準ハ準特殊會社		

業種	會社名	公稱資本	拂込資本
機械器具工業			
	同和自動車株式會社	三〇〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇〇
	株式會社奉天造兵所	二五〇〇〇〇〇〇	一四〇〇〇〇〇〇
	滿洲計器株式會社	八〇〇〇〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇〇〇
	滿洲電行機製造株式會社	一〇〇〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇〇〇
	滿洲自動車製造株式會社	一〇〇〇〇〇〇〇	二五〇〇〇〇〇〇
	滿洲工作機械株式會社	二〇〇〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇
業種			
	化學工業		
	滿洲石油株式會社	二〇〇〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇〇〇
準十	大同酒精株式會社	一六七〇〇〇〇〇〇〇	一六七〇〇〇〇〇〇〇

準	滿洲曹達株式會社	一	六、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	滿洲合成燃料株式會社	五	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	滿洲油化工業株式會社	二	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	吉林人造石油株式會社	一	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
準	滿洲大豆化學工業株式會社	三	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	滿洲電氣化學工業株式會社	三	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	滿洲硫安工業株式會社	五	〇、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
準	滿洲化學工業株式會社	二	五、	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	滿洲特殊製紙株式會社		二、	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇
父			準八	準特	殊	會	社			
				二	一	一		三		三	一
			二、	五、	二、	一、	七、	五、	七、	〇、	一、
			五	〇	五	二	五	〇	五	〇	〇
			〇	〇	〇	五	〇	〇	〇	〇	〇
			〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

山口高等商業學校論文用紙

五、滿洲工業國策會社現勢

(一)工業

(1)滿洲重工業開發株式會社

政府ハ康德四年(昭和十二年)日本ニ於テ最モ新シキ綜合經營ニ成功セル日產ヲ物駐セシメ、之ヲ改組シテ、十二月二十七日政府半額出資ノ下ニ資本金四億五千萬圓ヲ以テ滿洲國特殊法人タル滿洲重工業開發株式會社ヲ創立シタ。

滿洲重工業開發株式會社ハ元日本產業株式會社ト稱シテ居リタルモ康德四年(昭和十二年)十二月二十七日滿洲重工業開發株式會社管理法施行ト同時ニ商號ヲ滿洲重工業開發株式會

社ト改メ、滿洲國政府監督ノ下ニ滿洲國ニ於ケル重工業ノ綜合的開發及確立ヲ目的トスル強力ナル國策會社ニ改組セラレタ。

イ、滿洲重工業開發株式會社ノ使命

次來滿洲重工業開發株式會社ハ設立後十箇年間滿洲國内事業ノ爲ニ振向ケタル一切ノ資金ニ對シ政府ヨリ年六分ニ相當スル收果及元本ヲ保證セラレ、重工業部門ノ政府ノ實行機關トシテ、滿洲國内ノ鐵鋼業、輕金屬工業、自動車製造業、航空機製造業、石炭ノ礦業ノ經營指導ニ當ル外、金、亜鉛、鉛、銅其他ノ鑛業及

主管部大臣ノ認可ヲ受ケタル内外諸事業ニ對
シ投資スルヲ得、斯クシテ滿洲國産業開發五
箇年計畫ニ即應シ、滿洲國ノ厖大ナル埋藏資源
ヲ綜合開發スベキ重大使命ヲ課セラレ、各關係
會社トノ連絡ヲ密ニシ以テ綜合經營ニ遺憾ナ
キヲ期シ或ハ關係會社ノ役員中ニ當會社ノ代
表ヲ加ヘ事業經營ノ根本方針ノ決定ニ參畫セ
シメ、或ハ其ノ事業資金ノ調達ヲ引受ケ各社ノ
社債ニ對シ保證ヲ實行シツヽアル。

12. 滿洲重工業開發株式會社ノ現狀

滿洲重工業開發株式會社ハ以上ノ使命ニ基キ、創立以來既存企業ノ統合、新規企業ノ設立、之等關係會社ノ生産設備ノ擴充等ヲ逐次實行シ滿洲重工業綜合經營ノ體系ヲ漸ク整備シツヽアル。

即チ株式會社昭和製鋼所ヲ初メ滿洲炭礦株式會社、滿洲輕金屬製造株式會社、同和自動車株式會社等ノ既設諸會社ヲ其ノ傘下ニ收メ、隨時必要ニ應ジテ右會社ノ增資ヲ行ヒ、其ノ設備ヲ擴張シタ。尚前記既設諸會社ノ外、新タニ金、銀、銅等鐵、石炭以外ノ礦物ノ採掘、精錬、賣買ヲ

山口高等商業學校論文用紙

目的トスル滿洲鑛山株式會社ヲ初メ航空機ノ補給ヲ圓滑敏速ナラシメル目的ヲ以テ滿洲國特殊法人滿洲飛行機製造株式會社、金屬マグネシウム工業株式會社等ヲ相繼イデ設ネシウムノ製造並販賣ヲ主タル目的トスル滿洲マグネシウム工業株式會社ヲ創立シ、尚通化省管内ニ於ケル鐵鑛及石炭資源ノ開發ヲ圖ル下共ニ該資源ニ依存スル製鐵事業ノ確立ヲ目的トスル東辺道開發株式會社ヲ創設シ更ニ自動車製造工業ノ本格的確立ヲ圖ル目ヲメ滿洲自動車製造株式會社ヲ設立シ、次イデ株式會社本溪湖煤鐵公司ノ增資ヲ機ニ當會社ノ關係會社トナリタ。

斯クシテ康德七年一月末現在ニ於ケル當社在滿關係會社ノ公稱資本金ハ合計九億一千五百萬圓ニ拂込資本金合計七億四千六百八十五萬圓ニ其ノ内當社投資額ハ六億四千八百四十三萬三千圓ノ巨額ニ達シテオル。

以上述ベタルが如ク斯クモ其ノ種類ニ於テ多樣ナル、其ノ數量ニ於テ厖大ナル資源ヲ擁シ之ヲ綜合利用シ得ベキ地位ニアルコト並ニ之が綜合運營ニ擁スル資本ノ規模ノ大ナルコトニ於テ工鑛業部門ニ關スル限リ、日滿間ニ於テ其ノ比類ヲ見ザルトコロデアリ、當社ノ使命ハ洵ニ重且大其ノ目標トスルトコロ極メテ遠大ニ

シテ、此ノ大事業達成ニ何ツテ當社ハ目下關係事業ノ綜合經營體系ノ整備ト其ノ充實ヲ企圖シ一意邁進努力シツヽアル。

八、重工業資源

滿洲ニ於ケル重工業資源ノ重要性ニ就イテハ以前ヨリ提唱サレタルガ其他ノ關係上滿鐵關係以外ハ其ノ開發セラレタルモノ極メテ少ナク、滿洲國成立ト同時ニ政府ハ直チニ舊軍閥時代ノ枢政ヲ改メ大ニ力ヲ内政ニ注ギ一方盟邦日本ノ人的並ニ經濟的協力ニ依リ之ガ開發ニ相車ヲカケ最近ノ資源

發見ハ茲ニ、三年間ニ其ノ量ニ倍以上ニ達シタ。

主タル重要資源ニ就キ概略ヲ述ブレバ次ノ如シ。

1、鐵鑛資源ハ鞍山及安奉線附近並ニ東辺道一帶ニ亘リ有鑛約二十九億三千萬瓲、鑛ハ東辺道ヲ主トシテ約一億二千萬瓲ノ埋藏量アリト稱セラレ、鑛量豐富ニシテ年額五百萬瓲ノ鉄鐵ヲ裕ニ百年以上ノ長期ニ亘リ生産可能デアル。

2、石炭資源ニ就イテハ滿洲國成立以前ニ於テ撫順其他ヲ合セ其ノ埋藏量約四十八億瓲ト稱セラレシガ建國以來官民一致鋭意調査ニ努力シタル結果現在ニ於テハ撫順

ノ約四倍及至五倍ニ相當スル旱新、鶴岡ヲ
首メ札幌諸國、密山等何レモ十億瓩以上ノ
埋藏量ヲ有スルコトヲ確メ其ノ總額實ニ
二百億瓩ノ巨額ニ上ルモノト推定サレ、尚
ホ最近東辺道其他ニ於ケル調査ノ進捗ト
共ニソノ數字ハ増々巨大ニナルモノト豫
想サレル。

3、輕金屬資源ハ金屬マグネシウムノ原料ト
シテ品質埋藏量共ニ世界的鑛床タル菱苦
土鑛ガ大石橋及海城ヲ中心トシテ存在シ
其ノ埋藏量ハ十一億三千萬瓩ト稱セラレ
又アルミニウム原料タル礬土頁岩ノ埋藏

山口高等商業學校論文用紙

量ハ煙臺、牛心臺、小市ヲ首メ合計二千五百萬瓲ニ達シ多量ノ金屬アルミニウムヲ生産シ得ル。

4. 油母頁岩ハ天然油ノ最モ缺乏セル日滿兩國ノ現狀ヨリ之ヲ利用スル人造石油工業ノ發展ハ目下ノ急務ニシテ撫順ニ於テハ既ニ技術的採算的ニソノ抽油ニ成功シ、日本ニ於ケル天然油ノ生産額ヲ凌駕スルモノアリ。

油母頁岩ノ總埋藏量ハ約七十六億萬瓲ト推算サレ、ソノ中撫順ハ最モ多ク其他間島、三姓、熱河地方ニ於テモ大量ノ埋藏量ヲ有

シ品位優秀ニレテ之等ガ企業化ハ極メテ有望視サレテ居ル。

5、鉛、亜鉛ハ良品位ノ鑛床、青城子、楊家杖子、天寶山ヲ中心トシテ總埋藏量百八十萬瓲アリ、最近開發セラレツヽアルモ調査ノ進行ト共ニ其ノ鑛量増加シ、増々有望視ヲ加フルニ至ツタ。

6、金ハ主トシテ砂金ナルモ、山金モアル、其ノ産地トシテハ古來知ラレタル北滿ノ外、最近更ニ熱河及南滿地帶ニ亘リ相當有望ナル資源續々發見セラレ加フルニ現代的採金方法ト國立奉天金礦精錬所ノ活動ト共

二其ノ増産ハ期シテ待ツベキモノガアル。

二、滿洲重工業開發株式會社管理法拔萃

第一條　政府ハ本邦ニ於ケル重工業ノ綜合的確立ヲ促進シ其ノ統制ヲ圖ル爲本法ニ依リ滿洲重工業開發株式會社ヲ管理ス

第二條　滿洲重工業開發株式會社ハ本邦ニ於ケル左ニ掲ゲル事業ニ投資シ其ノ經營ノ指導ニ當ルヲ以テ目的トス

一、製鋼業

二、輕金屬工業

三、自動車製造業

四、航空機製造業

五、石炭礦業

滿洲重工業開發株式會社ハ前項ノ事業ノ外金、亜鉛、鉛及鋼其他ノ鑛業又ハ其他ノ事業ニ附帶的ニ投資スルコトヲ得但シ本邦ニ於ケル鑛業ニ對シ投資スル場合ヲ除クノ外主管部大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第四條

滿洲重工業開發株式會社ノ資本ノ額ハ四億五千萬圓トス但シ主管部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ增加スルコトヲ得

前項但書ノ場合ニ於テハ會社法第九十七條第二項ノ規定ニ拘ラズ議決權ナキ株式ヲ發スルコトヲ妨ゲズ

第十二條　滿洲重工業開發株式會社ノ毎營業年度決算ニ於テ株主ニ支拂フベキ利益配當金ガ拂込ミタル株金額ニ對シ年七分五厘ニ割合ニ相當スル金額ニ達スル迄ハ政府ノ所有スル株式ニ對シ一政府以外ノ者ノ所有スル株式ニ對シ二ノ割合ニ依リ配當ヲナスコトヲ得

第十三條

政府ハ滿洲重工業開發株式會社ノ毎營業年度決算ニ於テ滿洲國内經

別ノ定リ為スコトヲ要ス

拘ラズ主管部大臣ノ認可ヲ受ケ格

キ利益配當金ニ付前二項ノ規定ニ

為ス場合ニ於テハ株主ニ支拂フベ

第四條ノ規定ニ依リ資本ノ增加ヲ

ニ付同率トス

合其ノ超過金額ノ配當率ハ各株式

ノ割合ニ相當スル金額ヲ超ユル場

込ミタル株金額ニ對シ年七分五厘

株主ニ支拂フベキ利益配當金カ拂

山口高等商業學校論文用紙

營事業ニ關シ生ジタル綜合純益ガ滿洲國内經營事業ノ爲振向ケラレタル資金總額（滿洲國ハ經營事業ニ關シ生ジタル益金ヨリ成ル資金ヲ除ク）ニ對シ年六分ノ割合ニ達セサル場合ニ於テハ本法施行後十年以内ニ終了スル營業年度ヲ限リ其ノ不足額ニ相當スル金額ヲ補給スル補給シタル金額ハ爾後ノ營業年度ノ綜合純益ガ年六分ノ割合ヲ超過シタル場合ニ於テ其ノ超過金額ヲ以テ年二分ノ割合ニ依リ計算シタル

利息ヲ附シ之ヲ償還スルコトヲ要ス

前項ノ繰合純益ハ毎營業年度ニ於ケル滿洲國内經營事業ニ關シテ生ジタル總益金（繰越益金ヲ含ム）ヨリ總損金（借入資金ノ利息ヲ除ク）ヲ控除シテ之ヲ計算ス

第十四條

滿洲重工業開發株式會社解散ノ場合ニ於テ殘餘財産ノ價格ガ拂込ミタル株金額ニ對シ一倍半ニ相當スル價額ニ達スル迄ハ政府ノ所有スル株式ニ對シ一　政府以外ノ者ノ

所有スル株式ニ對シ二ノ割合ニ依リ殘餘財産ノ分配ヲ爲スコトヲ得

殘餘財産ノ價額カ拂込ミタル株金額ニ對シ一倍半ニ相當スル價額ヲ超エル場合甚ノ超過價額ノ分配率ハ各株式ニ付同率トス

第四條ノ規定ニヨリ資本ノ增加ヲ爲ス場合ニ於テハ株主ニ對スル殘餘財産ノ分配ニ付前ニ項ノ規定ニ拘ラズ主管部大臣ノ認可ヲ受ケ格別ノ定ヲ爲スコトヲ要ス

第十七條　滿洲重工業開發株式會社ハ營業年度毎ニ事業計畫ヲ定メ之ヲ主管部大臣ニ提出スベシ之ヲ變更シタルトキ亦同ジ

(2) 株式會社昭和製鋼所

鞍山鐵鑛ハ明治四十二年八月滿鐵湯崗子驛西方ノ一小丘ノ名稱鐵石山ト云フ文字ニ起因シテ之ヲ實調査シタ結果滿鐵地質課長水戸忠太郎氏ニ依リ發見セラレ引續キ全鑛區ガ發見セラレタ。當地方ニ於ケル鐵鑛ハ數百年ノ昔既ニ土人ニ依リ發見採掘セラレタモノニ如キ土産品ガアルガ其ノ史的考證ハ詳デナイ。

大正四年日支條約附屬公文ニ基キ大正五年十二月日支合辦ノ振興無限公司ガ創設サレ、之レヲシテ採掘權ヲ獲得保有セシメタ。

大正五年四月滿鐵ニ對シ製鐵業經營ノ認可アリ、茲ニ於テ同社ハ大正六年三月鞍山ニ工場建設起工シ翌七年五月鞍山製鋼所ヲ創設シ、入年四月二十九日第一熔鑛爐ニ火入シ作業ヲ開始シタ。

翌九年一月ヨリ選鑛ニ關スル組織的研究ニ着手、同十一年六月還元焙燒爐ニ依ル鞍山式貧鑛處理法ノ特許權ヲ獲得、翌十二年十月選鑛工場ノ建設ニ着手シ、同十五年七月完成、選鑛作業ヲ開始シタノデアル。

大同二年（昭和八年）四月多年懸案ナリシ製鋼事業ヲ鞍山ニ於テ開始スルコトニ決定サルヽニ及ビ同年六月滿鐵直營ナリシ鞍山製鋼所ノ

[illegible]

大正[illegible]年[illegible]

事業一切ハ當株式會社昭和製鋼所ニ讓渡セラレタ。

茲ニ於テ當社ハ採鑛、製銑、製鋼ノ一貫作業ヲ施行スルコトナツタ。

康德四年（昭和十二年）十二月日滿兩國間ニ於テ實施セラレタル治外法權撤廢附屬地行政權移讓ニ伴ヒ、從來日本國法人ナリシ當社ハ滿洲國法人ニ變更サレ、次ヒデ滿洲重工業開發株式會社ノ設立ニヨリ康德五年（昭和十三年）三月其ノ關係會社トナリ、更ニ康德六年五月二十五日勅令第百二十一號株式會社昭和製鋼所法施行ニ依リテ滿洲國特殊法人トナツタ。

會社設立ノ意義

日本内地ノ製鋼業ハ其ノ原料タル鐵鑛石ニ乏シク、所要量ノ大部分ヲ南洋及中支那方面ニ仰ギ又銑鐵、屑鐵等ノ諸原料モ其ノ多量ヲ輸入スルニ俟ツ狀態ニアル。

然ルニ當鞍山ハ工場ヲ中心トセル約十六粁ノ半徑内ニアリ、東鞍山、西鞍山、大孤山、櫻桃園、王家堡子、白家堡子、關門山、新關門山、一礮山、鐵石山、小嶺子、ノ數鑛區ニ分レ、大部分ハ貧鑛ニ屬スルモ鑛量豐富ニシテ約六億瓩ト推算サレテ居ル。

又遼陽ノ南東四十八粁、鞍山ヨリ五十六粁東

北ノ弓長嶺ハ東部黄泥南鑛ヨリ西北ニ延ビ、黄泥南鑛、石嶺及蘇家係子ノ三區域ニ分レテ井ル。

優良且豊富ナル富鑛及貧鑛ヲ埋藏ス、未ダ探鑛未了ノ部分ガ殘サレテオルモ、大凡判明セルトコロニヨレバ、富鑛ハ二千萬瓲以上ニ上リ概レテ六五%以上ノ鐵分ヲ含ムモノガ多イ。三〇%及至四〇%ノ貧鑛ハ無慮六億瓲ト算セラレテ井ル、之鞍山ニ製鐵事業ノ設立セラレタル所以デアル。

當社ノ使命ハ此ノ資源ヲ開發シ滿洲基礎産業ノ確立並ニ日本鐵鋼ノ自給自足ニ寄與シ併テ日滿支三國ノ産業振興ニ必要ナル鐵鋼製品

ヲ製造スルニアル。

當會社ハ鞍山製鋼所創業以來茲ニ二十年事業ノ基礎全ク確立シ天惠的資源ノ豐富ト地理的人的好條件ニ惠マレ、今ヤ世界的ニ雄飛セントスル時期ニ到達セリ。

而シテ日滿産業五箇年計畫遂行ノ爲メ康德四年(昭和十二年)度ヨリ着手セル第三期及第四期增産計畫工事モ順調ニ進行シ、其ノ完成ニツイデ更ニ鐵鋼需要ノ激增ニ對應スルタメ今般第五期增産計畫ニ着手シタ。

本計畫完成ノ曉ニハ現在能力ノ約三倍以上ニ達スベク、日滿兩國ノ鐵鋼事業ニ貢獻スルトコロ頗ル甚大ナリ

ト謂フベシ。

即チ當社ハ此ノ國策的使命達成ノ爲大同二年（昭和八年）以來數次ニ亘リ鐵鑛增産計畫ヲ樹立シ之ガ實施ニ邁進シツツアル。

主要製品

(イ) 銑鐵

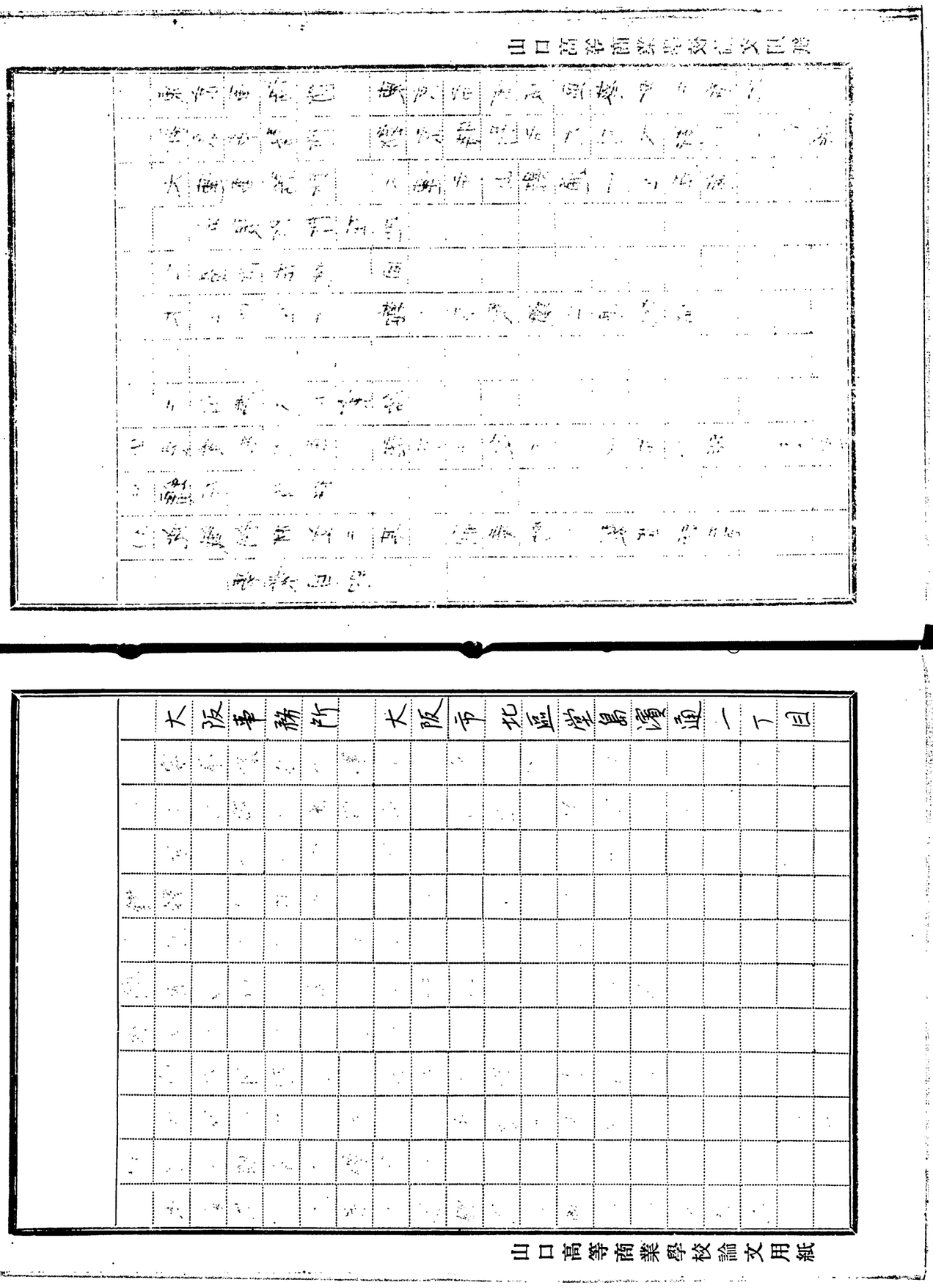
(ロ) 鋼片

(ハ) 鋼材、軌條、大型鋼材、小型鋼材、線材、スケルプ、薄鋼板

(ニ) 副産物

リン、クレオソート油、ピッチ、鋪裝用タール、ベンゾール、硫酸アンモニヤ、ナフタ

	事業目的	
(イ)	銑鐵、鋼材並ニ其ノ副産物ノ製造販賣	
(ロ)	鑛石ノ探鑛	
(ハ)	産業部大臣ノ認可ヲ受ケタル前各號ノ事業ニ附帶スル業務	
	本社所在地	鞍山市製鐵工場地域
	工場所在地	同
	出張所所在地	
	大連事務所	大連市山縣通一九五號
	新京事務所	新京特別市大同大街四〇六號
	東京事務所	東京市赤坂區葵町二番地



(3) 株式會社本溪湖煤鐵公司

安奉線南攻驛ノ北東ニ位シ滿洲三大鐵山ノ一タル廟兒溝鐵山ハ、鑛區面積百九十萬坪ニシテ其ノ大部分ハ四〇%内外ノ鐵分ヲ有スル磁鐵鑛ノ貧鑛デハアルガ其ノ鑛量ハ約二億數千萬瓲ノ多キニ達シ、尚ホ六〇%及至六五%ノ富鑛亦鐵鑛モ處々ニ賦存シ、其ノ埋藏量約一千萬瓲ガ計上サレテヰル。

尚ホ同鑛山ノ北西ニ當ル歪頭山鑛山ハ品位三〇%以上ノモノ一億數千萬瓲ヲ埋藏シ、同樣將來ノ開發ヲ囑目サレル。

本溪湖ハ之等ノ原鑛石ニ配スルニ粘結性ニ

富メル半無煙炭、石灰石、耐火材料ヲ地元ニ産シ、且ツ用水ノ便ヲ得テ、製鐵事業地トシテ甚ダ恵マレタ條件ヲ具備シテ平ら。

大倉組ガ始メテ本溪湖炭山ニ手ヲ著ケタノハ明治三十八年一月ニシテ、次イデ同四十三年五月日清合辦ノ本溪湖煤鑛有限公司ヲ組織シ、同四十四年十月製鐵部兼營ト共ニ資本金ヲ大洋銀四百萬元ドシ本溪湖煤鐵有限公司ト改稱、大正三年二月更ニ三百萬元ヲ増資シテ資本金ヲ大洋銀七百萬元トセタ。爾來年ヲ追ツテ事業擴大シ滿洲事變後ハ中國側ノ株主權利ハ關東軍之ヲ代行シタルガ滿洲國成立後康德二年

（昭和十年）九月滿洲國政府、大倉組共同出資ノ資本金一千萬圓ノ準特殊會社ニ組織變更サレ基礎益々鞏固トナツタ。

康德六年（昭和十四年）五月滿洲國政府二千萬圓、滿洲重工業開發株式會社四千萬圓、大倉組四千萬圓ノ割ヲ以テ資本金一億圓ニ增資シ株式會社本溪湖煤鐵公司ト改稱シ茲ニ滿洲重工業開發株式會社ノ關係會社トシテノ新ナル發足ヲナシタモノデアル。

本溪湖ハ前述ノ如ク製鐵事業ニ不可缺ナル石炭、鐵鑛石、石灰石ニ富ミ硅石、マンガン鑛石ノ近在ト相俟ツテ南滿ニ於ケル重工業好適ノ地

ニシテ、滿洲産業開發五箇年計畫ノ樹立ヲ見ルヤ、當公司ハ國策ノ線ニ沿ヒ其ノ鐵飢饉克服ノ一端ヲ擔ヒテ從來ノ採掘石炭八十萬瓲ヲ二百二十萬瓲ニ銑鐵十五萬瓲ヲ百萬瓲ニ增産シ尚ホ加フルニ自家製造ノ銑鐵ヲ原料トスル製鋼六十萬瓲ノ生産設備ヲ伴セ仆ヒ茲ニ銑鋼一貫作業ヲ完成セントシ、著々ト所期ノ目的ヲ達成シツヽアル。

殊ニ當公司ノ石炭ハ前述セル如ク粘結性ニ富ミ製鐵用骸炭トシテ東洋屈指ノモノニシテ而モ其ノ一部ニハ低燐性ノモノヲ包藏シ、鐵鑛石亦低燐性ヲ以テ著名デアル。

之等ノ原料トスル低燐銑鐵ハ當会司獨特ノ生産品ニシテ軍器原料トシテ不可缺ノモノデアル。當テハ日本軍需品並ニ高級製鋼原料ハ遠ク瑞典銑鐵或ハ英國ヘマタイト銑鐵ノ輸入ニテ漸ク需要ヲ充シタル窮境時代ノ下リシニ鑑ミ當公司ハ多年辛苦研鑽ノ末、前述輸入品ニ優ル良質ノ低燐銑鐵ノ製造ニ成功シ、現今ニ於テモ完全ニ輸入品ヲ防遏スルニ至ツタ。

(イ) 石炭、鐵鑛石、其他製鐵業ニ必要ナル鑛物ノ採掘

事業目的

(ロ)種々ノ鋳鐵、コークス等ノ製造

(い)石炭、コークス並ニ鋳鐵其他ノ販賣

(ニ)前記各號ニ附帶スル業務

副産物　硫安、コールタール、耐火煉瓦並ニモルタル、鑛滓煉瓦等ノ製造事業

諸機械類ノ修繕並ニ製作事業

自家發電ニ依ル動力、電灯ノ配給事業

本社所在地　奉天省本溪縣本溪湖街

出張所所在地　新京特別市大同大街大興ビル内

(4) 東辺道開發株式會社

東辺道一帶ニ亘リ豊富ニ埋藏セル鉄鑛資源ハ今日ノ調査ノ程度デハ未ダ其ノ全貌ヲ紹介シ得ザルヲ遺憾トスルガ通化省内西部ヲ道溝、三道溝ヨリ東部大栗子溝附近ニ至ル東西約五十粁、南北約十五粁ノ間ハ略確實ナル鑛床地帶ト推定サレ、東辺道東北一帶ニ殘サレタ未踏ノ地域ニモ地質的條件ヨリ推シテ類似鑛床ノ賦存ヲ期待シ得ル。

惟フニ東辺道ハ「東洋ノサール」トモ稱スベキ「ミネラルゾーン」ニシテ現在判明セル資源ニ就イテ説明スルト

大栗子溝ノ鐵鑛ハ赤鐵鑛ニシテ其ノ鑛脈多キハ十數脈ニ達シ、厚サハ十數米ヲ超エ、略整然タル平行脈ヲナシ採掘ニ有利ナル狀態ニアル。含鐵品位平均六三%ヲ誇ル世界的富鑛デアリ其ノ埋藏量九千萬瓲ト推定サレテヰル。

七道溝ノ鐵鑛ハ主要鑛石ハ赤鐵鑛及磁鐵鑛ニシテ含鐵品位五二%デ之亦世界ノ水準ヲ拔ク富鑛デアリ、而モ約五%ノ滿俺ヲ有シ滿洲ニ於ケル滿俺鑛石ノ不足ヲ補フ特異ナ存在デアル。ノ埋藏量ハ大約一千萬瓲ニ近ク且ツ今後試錐或ハ坑道探鑛ノ實施ニ從ヒ更ニ增加スルモノト豫想サレル。

現在東辺道開發株式會社ニ依テ採鑛所ヲ設置サレテヰルモノハ、大栗子溝、七道溝ノミナンモ其他老嶺一帯ニハ五〇%以上ノ富鑛ヲ相當多量ニ埋藏シ、ソノ埋藏量ハ五千萬瓲ト稱セラル。其他石炭ニ就イテ見ルニ

五道溝附近

炭種ハ高度瀝青炭ニシテ一部ハ半無煙炭ヲ產ス。推定埋藏量一億瓲ヲ超エルハ確實デアル。

煙筒溝附近

大部分強粘結性炭ニシテ製鐵(用)骸炭ニ適ス。埋藏量三千萬瓲尚ホ調査ニ從ヒ增加ノ見込

鐵廠子　大部分強粘結及粘結性炭ニシテ埋藏量ハ約四千萬瓲ト推定サレ居ル

モ、目下鋭意精査中ナレバ更ニ新炭層ノ發見及炭量ノ増大アルベキ見込デアル。

大通溝、小通溝附近　推定埋藏量九百十萬瓲

砂子窰　大部分粘結性炭、推定埋藏量六百二十萬瓲

漢江、撫松　調査中

山口高等商業學校論文用紙

東辺道ノ資源的價値ハ大栗子溝、七道溝其他ノ鑛山ヨリ産出セル良質豊富ナル鐵鑛ニ配スルニ、製鐵用粘結性炭ヲ多量ニ賦存スルコト並ニ大栗子溝附近ニ石灰石、鐵廠子附近ニ耐火粘土等ヲ製鐵用資源併存スルコトニヨリ、其ノ資源的價値ハ倍加サレ、茲ニ製鐵事業基地トシテノ理想的條件ヲ形成シテヰル。

即チ東辺道開發株式會社ノ事業計畫ヲ見ルニ、第一期事業トシテ通化省内ニ於ケル鐵鑛石、石炭ノ採掘、販賣並ニ銑鐵ノ製造及其ノ製品ノ販賣ヲ行ヒ、第二期事業ニ於テハ五十萬瓲ノ生産能力ヲ有スル製鐵所ヲ建設シ、銑鐵製造

ヲ開始スルト共ニ之ニ關聯スル所要設備ヲ完了スル豫定デアル。既ニシテ鎔鑛ノ準備工作ヲ完了シ製鐵開始ノ基礎工事遂行ノ爲ニ道江建設局ヲ開始、幾多ノ困難ヲ克服シテ鋭意工場建設ニ邁進シツヽアル。

惟フニ以上屢述セル如ク東辺道ニ於ケル各重要資源賦存ノ實情ハ此ノ恵マレタル鐵鑛資源ノ開發利用ノ爲東辺道ノ各資源ヲ擧ゲテ之ヲ動員スベキヲ暗示スルモノニシテ、之ヲ個々別々ニ企業化スルが如キハ、天恵ノ利用ヲ謬ル

モノト謂フベク、之當會社が從來滿洲國が執リ來リタル行キ方ト趣キヲ異ニシ、同域ニ限リ綜

合開發機關ヲ設置セシ所以デアツテ當會社ノ特色モ茲ニ有スルモノデアル。

斯クシテ當會社ノ前途ハ洵ニ洋々、數年後ニ於ケル驚異的發展ハ刮目シテ待ツベク、嘗テ滿洲ニ於ケル重工業黒地ノ東辺道ハ一轉シテ滿洲ノ心臓部トシテ出現スルニ至ルベシトハ容易ニ首肯サルヽトコロデアル。

事業目的

(イ) 通化省内ニ於ケル鐵鑛石、石炭及製鐵用鑛産物ノ採掘並ニ販賣

(ロ) 銑鐵、鋼材並ニ副製品ノ製造及販賣

(い) 純鐵ノ製造加工並ニ販賣

(ろ) 前各號ニ附帶スル業務

(は) 前各號ニ關聯スル事業ニ對スル投資並ニ融通

本社所在地　新京特別市大同大街四〇六號

設立年月日　康德五年(昭和十三年)九月十四日

(5) 滿洲輕金屬製造株式會社

アルミニウム工業

アルミニウムノ需要範圍ハ年ト共ニ擴張セラレ、小ハ日常用品ヨリ大ハ航空機、自動車、艦船、兵器、建築材料並ニ諸機械ニ至ル迄何レモ其ノ需要ヲ増大シ特ニ最近航空機ノ發達ト軍艦號備ノ高度化、加工技術ノ發達等ノ爲メアルミニウムハ消費増加顯著トナリ今ヤアルミニウム工業ノ確立ヲ圖ルコトハ平戰兩時何レヲ問ハズ産業上、軍事上必須ノモノトシテ重要視サレルニ至ツタ。

滿洲國ニ於ケルアルミニウム工業ヲ概觀ス

ルニ其ノ原鑛石タル礬土頁岩ハ概ネ奉天省ヲ首メトシテ錦州省、熱河省等南滿地方ヨリ北ハ龍江省ニ亘リ豊富ニ埋藏セラレ、最近ニ於テハ新鑛床ノ發見相次イデ起リ而モ其ノ採掘ハ容易且至便ニシテ低廉ナル原料ヲ確保シ得ルノミナラズ、該工業ノ死活ヲ制スベキ電力亦豊富低廉ニシテ本事業ノ確立ニハ日滿兩國ヲ通シ最適地ト謂フコトが出來ル。

滿洲國内ノ礬土頁岩主要産地トシテ現在判明セルモノハ關東州内ノ復州、大魏家屯、奉天省内ノ小市、同師付、牛心臺、李濱湖、煙臺、寒波嶺、熱河省内ノ松樹臺、五道嶺、錦州省内

ノ虹螺峴、大窰溝、葦子溝、下黑魚溝、安東省内ノ双山子ガ數ヘラレ就中小市、田師付中心臺等ハ有名ニシテ埋藏量モ豊富デアル。其ノ全滿ノ推定埋藏量ハ合計一億二千萬瓲ニ達シテヰル。

從來之等豊富ナ資源ノ適當ナ開發機關ナクアルミニウム資源ハ未開發ノ儘放置サレテヰタガ日滿兩國ノ國防工業ノ充實ト國内資源ノ開發ノタメ、大同元年(昭和七年)滿鐵ハ之ガ工業化ヲ圖リ撫順ニアルミニウム試驗工場ヲ建設シ更ニ大同二年ニハ滿鐵中央試驗所内ニモ工業試驗ノ設備ヲ整ヘ、爾來兩所ニ於テ鋭意アル

ミナ及アルミニウムノ製造試驗ヲ繼續シ優秀ナル技術ノ完成ヲ見ルニ至ツタ。斯クテ康德三年（昭和十二年）十一月二日勅令第百六十號ヲ以テ滿洲國特殊法人トシテ滿洲輕金屬製造株式會社法ヲ發布シ、滿洲國政府及滿鐵出資ノ下ニ同十一月十日滿洲國特殊法人滿洲輕金屬製造株式會社ヲ創立シタ。

當會社ハ前記「田師付」小市、中心臺、煙臺、紅煤峴、等ヨリ產スル礬土頁岩ヲ原料トシ電力ハ撫順炭礦發電所ヨリ供給ヲ受ケ、撫順製油工場ノ「無灰シエールコーク」及ビ本溪湖煤鐵公司ノ「タール」ニ依ツテ自家製造セル電極

並ニ滿洲產螢石ヨリ得ラレル水晶石ヲ利用シテ其ノ主要生產品ハアルミニウム晒粉、鹽酸及硅素鐵ニシテ、アルミニウムハ輕合金トシテノ自動車、航空機其他高速度運行機器材、電纜、厨房器具、製鋼用、脫酸劑、建築材料、塗料其他ニ晒粉ハ纖維素工業用藥品、消毒劑ニ、鹽酸ハ化學工業藥品ニ、硅素鐵ハ脫酸劑、鑄物工業用ニ夫々利用サレテ居ル。

當會社ハ現下需要增大ノ趨勢ニ即應シテ康德四年(昭和十二年)六月九日製鍊工場建設ヲ撫順ニ着手シ康德五年六月第一期建設完了ト共ニ操業ヲ開始、待望ノ優秀國產アルミニウムノ

生産ノ見ルニ足ラタ。

次イデ着手セル第二次増産計畫モ今ヤ略完了、第三次増産計畫トシテ安東工場ノ建設ヲ開始シタ。

當社ノ主要生産品及其ノ用途次ノ如シ

(イ) アルミニウム　輕合金トシテ化學機械器具、飛空機材、電氣器具、送電線、建築材料、家庭用器具、塗料其他

(ロ) 硫酸　繊維工業用藥品、消毒劑

(ハ) 鹽酸　化學工業藥品

(ニ) 硅素鐵　製鋼脱酸劑、鑄物工業用

本社所在地	各地事務所所在地	關係會社
撫順市山本町	東京市芝區田村町四丁目一番地日産第二別館	滿洲マグネシウム工業株式會社
	大阪市東區堺高麗橋野村ビル	撫順セメント株式會社
	三三號	
	大連市山縣通り大連取引所内	
	新京特別市大同大街東拓ビル	
	二階	

(二)機械器具工業株式會社

(1)同和自動車株式會社

同和自動車株式會社ハ大同二年(昭和八年)九月関東軍司令部作成ノ會社設立要綱ニ基キ當時日本ノ主ナル自動車製造會社タル東京自動車工業、東京瓦斯電氣工業、三菱造船、日本車輌、川崎車輌、戸畑鑄物、日本自動車ノ各會社代表者間ニ於テ會社設立ノ協議成リ、同年十一月會社設立準備委員會トシテ吉田豊彦氏以下ガ任命サレ、直ニ創立事務所ヲ東京ニ置キ次デ奉天ニ移シ、関東軍特務部指導ノ下ニ會社ノ設立準備ヲ開始シ、昭和九年(康德元年)三月

[illegible]

(二) 滿洲重工業株式會社

二十二日同社自動車株式會社法ノ分布ヲ見、三月二十六日日滿合辯組織ノ滿洲國特殊法人資本金六百二十萬圓ヲ以テ新京ニ於テ創立總會ヲ開催シ同月三十一日設立登記完了、滿洲國ニ於ケル自動車工業ノ統制確立ヲ目的トシ自動車ノ製造、組立、販賣及修理ニ關スル事業ヲ經營スルコトヽナリタ。

康德五年(昭和十三年)四月滿洲國政府及滿鐵持株全部當社株式ノ五七四%ガ滿洲重工業開發株式會社ニ肩替リサレルニ及ビ其ノ直系會社トナリ同年五月三十一日株式全額拂込ヲ完了シ事業ノ擴充ニ備ヘタ。

越エテ康德六年戰時下生産力擴充計畫ノ要請ニ應フベク五月十一日臨時株主總會ニ於テ資本總額ヲ三千萬圓ニ增加シ次デ大連ノ倉田ボデー工場株式會社滿洲モータース會社ノ全機構ヲ接收シ一方同年五月當會社法ノ一部改正並ニ滿洲重工業開發株式會社ノ子會社トシテ自動車ノ一貫製造會社タル滿洲自動車製造株式會社設立サルヽニ及ビ姉妹關係ニ置カルヽ當社ノ事業目的ハ一層明確トナリ當社ハ自動車組立、販賣、修理、車體及部分品製造ニ制確立ニ邁進スルコトヽナレリ。當社相俟ツテ滿洲國自動車工業ノ發達並ニ統